2024年度 春季 ICYE Japan海外ボランティアプログラム 参加報告書

現地の高校生に日本文化をプレゼン

世界遺産のボロブドゥール遺跡

現地での夕食

1. 参加目的

「海外で日本語や日本の文化を教える」という目的が大きい。これは私が昔から将来やりたいと考えていたことだったため、このインドネシア日本語教育ボランティアのプログラムは私にとって大変魅力的であった。そして、それへの参加を通して、日本語の難しさや、面白さを海外の日本語学習者はどこにどう感じているのか、日本への興味はどこから湧いているのか、また、実際どれほどのレベルなのかを探求してみたかった。さらに、インドネシアは私にとってまったく未知の国であり、自分が知らない環境で過ごしてみたいとも考えていた。そうすることで、どんな環境でも耐える力、そこに楽しさを自ら見出そうとする力、そして人と関わるうえで重要なコミュニケーション力が身につくのではないかと思い、今回参加を決意した。

2. ボランティア実習内容について

高校と大学の日本語の授業のアシスタントをしていた。高校生は日本語がまだ自己紹介程度しかできないため、簡単な「私は誰でしょうゲーム」を授業で行った。また、日本の学校や年間行事のプレゼンをしたり、歌を歌ったり、またお寿司を作ったりした。一方大学生は、日本語学科の授業であったため、2年生以上はかなり能力が高かった。ただひたすら日本語で会話する授業がほとんどであったが、たまに英語の授業にも参加して、日本とインドネシアの違いをディスカッションした。他にも、高校の先生の紹介で、近隣の中学校のイングリッシュクラブに所属する生徒に向けて、日本に関するプレゼンを英語でしたり、日本にまつわるクイズ大会をしたりした。また、災害に遭った子供たちと一緒に遊んだり、日本の文化を体験するパーティーに参加して一緒にけん玉や盆踊りを楽しんだ。

3. プログラムを通して学んだこと

文化や言語が異なっても、お互いに異文化を楽しんで歩み寄ろうとする気持ちさえあれば、何をするにも困難はないということを実感した。実際、インドネシアと日本では言語も宗教も生活スタイルも大きく異なるから、もちろん考え方も違うのだが、それらを受け入れてその環境を自分で楽しもうとすることが必要だと感じた。例えば、時間に対する考え方だ。日本人は時間に対して厳しいが、ほとんどのインドネシア人は、約束の時間通りに事を進めることはない。だから、待たされることもしばしばであったが、そういった生活を日本人にはない「スローライフ」として受け入れて楽しむことを心掛けた。そしてそうすることで、相手にその気持ちが伝染して、お互いが持つ違いを興味深いものとして楽しむことができる。

4. ボランティアプログラムを終えての感想

果たして異国で1か月も生活できるのか、ちゃんと日本語や日本文化を教えられるのか、英語でのコミュニケーションはうまく取れるのか、など出発前は不安が多かった。ただ、行ってしまえば毎日が新しい刺激に溢れていて、楽しくて忘れたくない経験ばかりだった。たしかに文化の違いで戸惑ったことは多かったが、それすらにも順応していき、最後には帰国したくないと感じられるほどであった。学校では、生徒がどのレベルの日本語を理解できるのかを判断して、そのあとの授業内容を工夫したり、話し方を変えたりした。そういった点でも自分の将来のキャリアを具体的に想像できた貴重な機会だった。そして、英語を話せることがコミュニケーションでいかに大切かを痛感した。この1か月で何度も「英語力こそが、自分が日本について伝えられる量を左右する」と考え、今後の英語学習への糧となった。